事例
9

高校生との交流を通して連携・協働しよう（他校種間交流）

・高校生と５歳児の交流活動「クッキー作り」

ねらい

	５歳児	高校生（家庭科）
ねらい	・様々な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わう。	・５歳児と直接関わることによって、発達の特性や幼児理解を深める。
内容	・いろいろな人と触れ合い、自分の感情や意思を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して親しみをもち、人と関わることの楽しさを味わう。	・保育の方法や環境について自ら学び、保育に主体的に取り組む。

～方法～

① 保育者と高校の教員の交流
　・幼児教育、高校教育について相互理解を図り、深め合う。

② 保育者と高校生の交流
　・高校の家庭科、造形表現活動（壁面）の授業を保育者が行う。

③ ５歳児と高校生の交流
　・高校生の考えた交流内容で、高校生と５歳児の交流を行う。
　・高校生が園の生活を体験する。

【５歳児と触れ合う高校生】

～実践の展開～

① 保育者と高校の教員の交流（活動前の情報交換）

・保育者と高校の教員が、交流を通して５歳児や高校生に何を経験してほしいのかについて、打ち合わせをする。

５歳児には…
・いろいろな人と関わることで愛情を感じたり、感性を豊かにしたりしたい。
・「大きくなったら、こんなこともあんなこともできる」という憧れの気持ちをもてるようになってほしい。
・自分がしてもらったように、自分より「小さい子」に優しく接するようになってほしい。

高校生には…
・実際に５歳児と触れ合うことで、５歳児の発達や、興味や関心を学ばせたい。
・５歳児に対して、可愛いという愛着の気持ちをもち、子供と関わる職業に就きたいという思いをもってもらいたい。
・相手のことを思いながらできることを考え、予測し、計画を立て、事前準備をして、理解を深めてもらいたい。

② 保育者と高校生の交流

・高校の教員から依頼を受け、保育者が壁面構成についての授業を高校で行う。
・前半は、壁面を構成する時の目的（見る人に何を感じてほしいか）や、素材、材料等、使うものによって雰囲気や出来上がりが違うこと等をパワーポイントで具体的に講義した後、課題（クリスマスの壁面）を出し、実際に作成をする。
・作成しながら、高校生の質問に答えたり、具体的に指導したりする。

③―１　５歳児と高校生の交流【クッキー作り】

〈交流前の準備活動〉

- 高校生から交流内容について３つほど（絵本読み聞かせ、リトミック、クッキー作り等）の候補を受け取る。
- 高校生の考えを尊重して、交流活動を計画する。
- 安全・衛生面に十分配慮して、計画の詳細を練る。
- 高校生から依頼を受けた５歳児の氏名を伝え、「５歳児の好きなものアンケート」に答える。

〈交流当日〉

５歳児は、高校の校舎や教室の大きさ、広さ、いろいろな部屋に関心を寄せ、辺りをキョロキョロしながら高校の教員に案内されて教室に行った。あらかじめ、アンケートで５歳児の好きなものを調査していた高校生が、子供一人一人にクッキー作りで着用するエプロンを作って用意してくれていた。

【クッキー作りの準備開始！】

【手作りエプロン】

高校生が、緊張した面持ちの５歳児一人ずつにエプロンを着せてくれた。そして、優しく言葉を掛けてくれながら、一緒に手を洗い、クッキー作りが始まった。最初は表情が硬かった５歳児も「こうやって押すと柔らかくなるからやってみて」という、高校生の優しい対応に安心し、笑顔で生地をこねていた。そして、教えてもらいながら、型が取れるように平らに伸ばした。

←【作業が進むにつれて笑顔が増す５歳児】

「これ（型抜き）で好きな形を作ってね」「きれいにできたね」などと、高校生に褒められて一緒に作業をしていくうちに５歳児の緊張もほぐれ、少しずつ笑顔になり、言葉を交わすようになった。型抜きした生地をオーブンに入れ、焼いている時には、「中が赤いね」「熱いから触らないでね」「いい匂いがしてきたね」「もう、焼けたかな」「茶色くなってきたね」と、会話もはずみ、一緒にオーブンの中をのぞき込んだ。

【一緒にオーブンを眺める】

【会話が増える】

【協力してやり遂げた！】

焼けたクッキーをビニール袋に詰め、高校生がデコレーションした紙袋に入れてもらうと、５歳児はとてもうれしそうであった。お別れをする時には、すっかり打ち解けて、高校生に抱きついたり身をゆだねたりして、親しみの気持ちを表した。そして、高校生にプレゼントされたエプロンとクッキーを大事に家に持ち帰った。「家庭でもエプロンを身に着けて、喜んで家の手伝いをするようになった」と保護者が教えてくれた。５歳児にとって、高校生との触れ合いは、他年齢の人と関わる貴重な体験となった。

【デコレーションされた紙袋】

〈交流を終えて〉

高校の４５分という短い授業時間の中ではあったが、一緒に同じ目的（クッキー作り）をもって活動したことは５歳児にとっても、高校生にとっても距離を縮めることになった。５歳児は、家庭でも高校生からもらったエプロンを鏡の前で身に着けてポーズを決め、「お母さん、僕はスーパーお手伝いマン、何かお手伝いすることない？」と、洗濯物を畳んだり掃除機をかけたりして喜んだ。

優しくしてもらうことの喜びや、うれしさを十分に味わうという経験は、人の愛情を感じることにつながる。愛されていると感じられることで、人にも優しく接していこうとする気持ちが育つだろう。

高校生のアンケートには、「５歳児なりの考え方がある」「発想力がすごい」という感想があった。高校生にとっても５歳児との直接体験が、大きな学びにつながっていることが分かった。

【交流が家での手伝いにもつながった】

高校生アンケートより

- とても楽しく充実した時間でした。園の子が「お母さんにあげる」と言って、ハートの形のクッキーを作っていました。５歳児には５歳児なりの考え方があって、私たちと違う感性をもっていて可愛かったです。
- 私たちが当たり前にできることが、園の子には難しく、注意して見守っていく必要がありました。最後には心を開いてもらえたように感じました。
- 園の子と関わって、あらためて保育者の大変さや楽しさを知ることができました。
- クッキーの型を使わず、自分で形を考えていて、発想力がすごいと思いました。
- 普段、授業で学んでいることを実践するということは難しかったけれど、実践するってすごく大切だなと思いました。
- 一緒に作業することで、５歳児たちがどのくらい器用に手を動かせて、どのくらい動物や形を知っているのかが分かりました。

③―２　５歳児と高校生の交流【園での遊び】

〈５歳児の様子〉

- 初めて会う高校生に戸惑うが、時間が経つうちに打ち解け、一緒に園で飼っているウサギを見たり、ままごとや戸外での遊び、製作等を楽しんだりするようになった。
- 慣れてくると、自分から高校生に作ったものを見せ、「これ見て。こうすると動くんだよ」と教えたり、「こっちに来て。一緒に遊ぼう」と親しみの気持ちをもって接した。
- 一緒に遊んでもらい、うれしさや喜びを感じていた。

【親しみをもって関わる】

〈高校生の様子〉

- 幼児期の子供と触れ合うことがなく、言葉を掛けようとするが、５歳児も緊張しているので、どのように関わってよいのか戸惑い、慣れるまでに時間がかかった。

【一緒に遊ぶ】

【関わり方がわかる】

・互いに緊張がほぐれてくると、一緒に遊ぶ中で、５歳児の発達や環境の構成、保育者の言葉の掛け方等、様々なことに気付いた。

【一緒に遊ぶ中で幼児理解を深める】

【いろいろな遊びができる環境になっていることに気付く】

５歳児と高校生の交流を通しての育ちや学び

５歳児たちは、高校生（人）の優しさを感じて

高校生は、５歳児の目の高さ（目線）に合わせて

ポイント

５歳児と高校生、互いの育ちや学びを確認する。

５歳児の育ち	高校生の学び
・初めは、緊張したり、戸惑ったりしながらも、様々な人と出会い、工夫したり、協力したりして、一緒に活動する楽しさを味わう中で、親しみや関わりを深め、愛情や信頼感をもつことができた。	・５歳児と直接関わることで、「小さい子」に愛情をもち、５歳児の発達の特性や幼児への理解を深めることができた。 ・体験を通して、保育の方法や保育の環境について自ら学ぶ姿勢が育った。

ふりかえり

学校種、施設種を越えた交流は、関わる全ての人の学びにつながる

少人数の園では、どうしても関わる人が限られる。その上、コロナ禍では様々な行事や交流の制限があった。そのため、保育者は、近隣の保育所、小学校との交流の他に地域の人々と継続的な交流の場を広げたいと願っていた。高校の教員と知り合うきっかけがあり、保育者と教員の出会いを子供の生活に生かしたいと考えたところ、同じように、高校の教員も高校生が園の子供に直接関われる機会を望んでいた。保育者と高校の教員が交流を深め、段階を踏まえて５歳児と高校生が交流できるよう計画を立て、はじめの一歩を踏み出すことにした。

交流をきっかけにして、５歳児にも高校生にも、それぞれの成長が見られ、「社会に開かれたカリキュラム」の実現の第一歩となることが分かった。

その後、高校生との交流をいろいろな園でも行えるように、実践例として情報提供したことで、園での子供の生活を知る園訪問、高校生の知識を生かすＩＣＴ交流等、様々な交流が始まりつつある。

園の子供と高校生、互いの交流の目的が達成されるためには、事前に大人同士が話し合い、計画的に継続していくことが必要である。

そして、幼稚園、保育所、こども園は、幼児期の教育への理解者を増やすために、積極的にアプローチしていくことが大切である。相手側にもメリットがあることで、交流活動は継続していくと考える。